

# 刀剣の歴史と思想

第19回

酒井 利信

## 新当流にみる靈劍の技術

剣術流派の中で、刀剣の思想を最も顕著に窺うことができるものは、塚原ト伝を中興の祖とする新当流と、その流れを汲む系統である。近世剣術界全体を大きく見渡して、このことに間違いはないと思う。

鹿島神宮を中心とした思想が強くかかわっている。その思想形成に神話のイメージが強くかかわっている。

今回は新当流剣術の世界を垣間見ることにする。

### ▼▼武の聖地 鹿島

日本の剣術を語る際、飯篠長威斎の天

真正伝香取神道流を剣術流派の三大源流

の一つとし、そこから新当流へと流れてい  
く系統を、三大系統の一つとするのが通常  
であるが、正確にはそう簡単な流れではな  
く、もう少し複雑になっている。神道流は、  
フツヌシを祭神とする香取神宮の信仰とか  
かわりながら発展してきた流派であるが、  
これとは別に鹿島には鹿島神宮を中心とし

た特有の剣の文化があつた。この地は剣豪塚原ト伝を生んだ地であり、ここで剣術において特筆すべき刀剣思想が展開していく。

そもそも鹿島とは、初代天皇と伝えられる神武天皇（カムヤマトイハレビコ）が、東征の際に自ら窮地を救ってくれたタケミカヅチという神を、即位の後に、感謝の気持ちから祀った地である。タケミカヅチは、国譲り神話や神武東征神話（<sup>1</sup>）に語られるように、師靈剣をもつて偉業を成し遂げてきた。この師靈剣は、この神の所



# 刀剣の歴史と思想

## 新当流にみる靈剣の技術

### 鹿島の太刀



鹿島神宮拝殿

新当流

ト伝以後の鹿島の剣の系統を新当流といふこととなる。ト伝は、他に類を見ないほど剣の技術に優れ、養父から神道流を習い、この伝統的な二つの流儀を融合させるような形で才能を開花させ、剣術史の中でひときわ異彩を放つこととなる。

ト伝は、鹿島の太刀を新当流といふ。

鹿島の太刀  
鹿島上古流  
鹿島中古流  
新当流

有する靈剣、あるいはこの神の分身とされ、それゆえにタケミカヅチは剣の神あるいは武の神とされている。これを祀った鹿島神宮は、歴史の中で必然的に武の聖地へとなつていった。

仁徳天皇の頃、国摩真人といふ人が、タケミカヅチの師靈剣の神術を後世に伝えよう、鹿島神宮の境内に祭壇を築いて日夜祈祷し、神妙剣という極意を悟つたと伝

えられている。これが鹿島の剣の始まりである。国摩真人の技術は、鹿島神宮の神官たちを中心伝えられ、当初これを鹿島の古流といふが、後に鹿島上古流、鹿島中古流と言い伝えられてきた。

この鹿島の剣の系統は、吉川といふ家が宗家として継承してきた。吉川家は、代々鹿島神宮の神官で、ト占を職務とする家柄であり、本姓をト部といつた。ト伝はこの吉川家の次男として生まれる。幼名は朝孝といつた。後に実家の本姓であるト部の一字をとつてト伝と称した。当然のように実の父である覺賢から鹿島中古流を仕込まれた。その後、次男であつたため塙原土佐守安幹のもとへ養子にいき、新右衛門高幹と名を改める。養父は神道流の遣い手であり、ト伝は今度は神道流を仕込まれることになる。つまりト伝は実父から鹿島の剣を、養父から神道流を習い、この伝統的な

新当流における刀剣思想を窺い知ることのできる文献としては、吉川家にいくつかものが残されているが、特に注目しておきたいのが『兵法自觀照』(以下『自觀照』)という史料である。これは天保十三年(一八四二)に大月閔平といふ人が、新当流の真髓を相当のボリュームをもつて書き記したものである。大月閔平は文化九年(一八一二)に、当時の家元であつた吉川常応から「唯授一人」の称号を受けた人物である。彼は常応から、新当流の初步から奥義にいたるまで詳しく書き記して道場へ納めるよう命じられた。再三辞退したものの、強く乞われて記したものが『自觀照』である。

この史料により、通常は徹底した秘密主義から知りえることのない当流派の真髓を、窺い知ることができる。その意味で非常に貴重な史料である。

▼塙原ト伝の参籠修行と  
一の太刀

鹿島といふ特殊な地が生んだ異才、塙原ト伝は、他に類を見ないほど剣の技術に優



れていたと伝えられる。

十七歳にして京の清水寺で

真剣の勝負に勝つて以来、真剣をつかつての試合が十九度、戦場を踏むこと二十七度、一度も不覚をとつたことはな

く、木刀をつかつての試合など數百度に及ぶといえども、切り傷、突き傷など一ヵ所も負うことなく、矢による傷を六ヵ所うけた以外には一度も敵の使う武器に当たつたことはない。およそ討ちとつた敵は二百十二人ともいわれる。五百年来無双の英雄である。

というのは、『ト伝百首』に

描かれたこの剣豪の武勇伝である。

相當に強かつたということである。

ト伝の伝説化されている技術に、『一の太刀

』という極意がある。これはいわゆる参籠

苦行である。この辺りの事情については、吉川常香が文政十一年（一八二九）に著した『鹿嶋新当流正統略伝』（吉川家文書）に記されている。

ト伝父兄ノ業ヲ受テ、幼弱ヨリ剣術達出ることなく、籠りきつて祭神であるタケミカヅチに祈りつつ剣の修行をするという

## ト伝の武勇伝



塙原ト伝肖像画（個人蔵）

ト伝父兄ノ業ヲ受テ、幼弱ヨリ剣術達出ることなく、籠りきつて祭神であるタケミカヅチに祈りつつ剣の修行をするという

リテ靈夢ノ告ヲ蒙リ、元祖国摩真人ヨリ嫡々相伝アリトイヘドモ其極意ヲバ悟リガタカリシ一々之太刀ノ妙理ヲ極メテ、當時無双ノ高手トナレリ、

ト伝は、父兄の業、つまり鹿島の剣の道統を引き継いで幼いころから剣術が達者であつたが、なお本当のところを修得してい



## ＜塚原ト伝の廻国修行＞



ないことを憂いて、鹿島神宮に一千日もの間参籠し、その結果、靈夢のお告げによつて一の太刀を悟り、當時としては肩を並べるものがないほどの達人となつた。以上のような内容である。

「元祖国摩真人ヨリ嫡々相伝アリトイヘドモ其極意ヲバ悟リガタカリシ一之太刀ノ妙理ヲ極メテ」（元祖である国摩真人より正統の血脉により伝えられてきたが、その極意が悟り得なかつた一の太刀の妙理を極めて）という部分の解釈には慎重を要するが（<sup>3</sup>）、いずれにせよ鹿島の剣を集め大成して極意を悟り、それを後世、一の太刀と言つているようである。この技術が並はずれて凄いものであつたことは容易に想像できよう。しかしそれだけに、これはたやすく相伝されるものではなく、信頼できる者ただ一人にしか伝えられなかつた。これを新当流では「唯授一人」という。

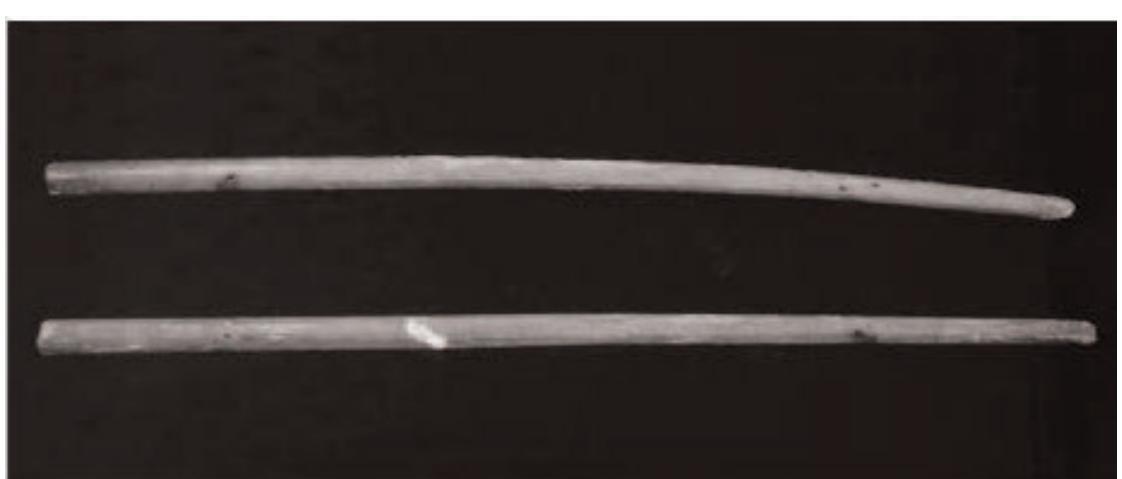
『本朝武芸小伝』<sup>4</sup>には、すでに大いに名を馳せていたト伝が、京に上り將軍足利義輝および義昭に剣や槍の技術を伝授したと記されている。これが史実であるかどうか怪しいところもあるが、それほどの名声

廻国修行

ト伝は人生の中で三回もの廻国修行を行つてゐるが、彼の武勇伝のほとんどが、一回目の廻国修行の際の逸話であるといわれている。しかしてト伝は、一回目の旅から

であつたことは事実であろう。『武芸小伝』は続いて、ト伝に学ぶ者は多かつたがその中でも傑出していた、伊勢の国司であつた北畠具教卿に一の太刀を伝えたこと、ト伝の高弟であつた松岡兵庫助もト伝の妙技を会得して、後に徳川家康に一の太刀を伝授したことなどを記している。塚原の家系を継いだのは養子である塚原彦四郎幹秀であるが、ト伝は既に唯授一人の一の太刀を北畠具教に伝えていることから彦四郎にこの極意を伝えることはなかつたという。彦四郎はト伝の死後、北畠をいつわつてこの極意を見せてもらつたという逸話も残つてゐる。この辺りの話が、史実かどうかはわからない。この後、この技がどう伝わつたのかも全く不明である。

徹底した秘密主義をとつていたがために、早くに失伝してしまつたというのが事実のようである。今となつてはその実態は分からぬ。



ト伝が使用したと伝えられる木刀（個人蔵）



帰るやいなや厳しい参籠修行に入つてゐる。師匠的な立場、あるいはよき理解者であつた松本備前守のすすめによるともいわれてゐるが定かではない。既に相当に高い技術を持つてゐたト伝が、なおも求めたさうに高い次元の技術とは一体何なのか。ここに、一の太刀の実態をひも解くヒントがあるようだ。

『自觀照』には、次のような記述がある。

是このひと津之生太刀者、一心之表物也、  
心与劍無二至也、——中略—— 理者雖レ  
説レ理其実唯在心、氣者雖レ説レ氣畢竟謂レ  
心——中略—— 故當流劍術者、心術之至  
誠極不レ可レ不レ尽、

一の太刀  
-  
心の技術を含んだ極意  
-  
師靈剣の神話的イメージ

一の太刀は、心が表れたものであり、剣と心が二つになることはない。理は理を説くといえどもその実はただ心にあり、氣は氣を説くといえども畢竟は心を言う。故に当流の剣術は心術を尽くすべきものである、といった内容である。つまり一の太刀とは、心の技術、心法を含んだ技術であると言えそうである。



塙原ト伝の墓（茨城県鹿嶋市須賀）

『ト伝百首』が語るように、廻国修行で人を斬り尽くしてきたト伝が突き当つた壁は、心の問題であつたのではないだろうか。斬つてきた人の数だけ遺恨をかい、いつ自分が逆に殺されるかという恐怖心、等々、様々な激しい心の乱れが生じていたはずである。これが太刀筋を狂わせる。それを乗り越えるための参籠修行であり、その結果、得られた極意が一の太刀であつた。

一の太刀が剣を振る技術を伴わない心法であるとは考えられないが、単なる操剣の

技術ではなく高度な心法を含んだものであつたと考へて良いだらう。

更に『自觀照』は、この一の太刀が神代の師靈剣の正脈を継ぐものであるということを述べる（<sup>5</sup>）。この極意の要諦である心法に、師靈剣のイメージが大きく関与していたことは十分に考えられる。

### ▼▼呪劍の技術

ト伝の技術を伝える新当流には、一の太刀の他にも非常にユニークな技術があることを『自觀照』に記されている。

靈劍呪振の太刀

ト伝の技術を伝える新当流には、一の太刀の他にも非常にユニークな技術があることを『自觀照』に記されている。

この技術も一旦、途絶えている。

『自觀照』には、その動作についての記述がある。実際の細かな動きについては知るよしもないが、記述にそつて理解すると、太刀を両手にとり、真直ぐに立ち、両足をそろえて剣を構える。頭上には天神を足もとには祇神を意識して、太刀の柄をに



ぎる。氣海丹田を意識しながら左手を太刀の半ばにつけ、砂摺りして左足を前にだし、祓いの太刀のごとく左右左右左右と進退しながら剣を振る、といったものであろうか。この技術の説明として、以下のような一節がある。

呪振の刀と申事は、伊弉諾尊、伊弉冉尊の黄泉国へ降賜時、進行玉ふ時、ハツの雷向へ来時、帶る剣を抜て呪振賜八雷恐て小るや、是呪劍を振起源也、云々、

確かにこの靈剣呪振の太刀という技が、呪術であることがわかる。現代科学に慣らされた我々には理解しにくいが、「ここに居て彼を制する、刀を血塗らずして」なさる技術が間違いなくあつたのである。

そもそもト伝は、神宮のト部職の家柄に生れおり、いうなればシャーマンの血を引いている。彼の技術が呪術的であつたことは、大いに理解できる。

ギが、死んだイザナミを追つて黄泉国へ行く。そこで穢れを意味する邪神としての雷神を、剣をもつて呪術で追い払つた神話である。これが呪劍を振る技術の起源であるという。

更にこの技術は、外敵のみならず、祓いのように、我が身の穢れといった内面的なものまでも処理しようとする呪術であったようである。

そして刀剣の思想として重要なことは、この技が、『自觀照』に「夫靈劍呪振の太刀と申は、即武甕槌太神の師靈劍御事を奉レ申也」（靈劍呪振の太刀とは、すなわちタケミカヅチの師靈剣のこと）をいうのである」と記されているように、一の太刀同様、意識的にはタケミカヅチの師靈剣を使う技術であるということである。

師靈剣の技術

神の力をかりた呪劍の技術があつたといふことである。

### シャーマンとしてのト伝

これは黄泉国神話の引用である。イザナ



# 刀剣の歴史と思想

新当流にみる靈剣の技術

## ▼ 平国(ひとむけ)の剣と鹿島に伝わる 国譲り神話

新当流においては、彼らが使う太刀と剣を同一視してみるような思想が殊更に強いが、この靈剣の神聖性の根拠は、やはり國譲り神話や神武東征神話に求められている。これが神々との関係を確かなものにするからである。

このうち國譲り神話について、鹿島の地に特有の展開が認められる。

この神話については、これまでにいく度となく取り上げてきているが、要点のみ再度確認すると、タケミカツチは葦原中國(あしはらのなかつくに)の統治権を譲るよう交渉しに下界に降りるが、この際、剣(靈剣)を上に向けて柄を波打ち際に突き刺し、切先の上に座つて大国主に國譲りを迫つた、というものである。

新当流では、この神話に関して独自の解釈をしている。以下、「自觀照」の記述である。

如書紀、倒植於地、踞其

鋒端(さき)、神変を現賜ふに非ズ、倒とは柄(つか)を握りて鋒端を地に衝立(さまたて)て、剣を後にして身を前に進て踞賜を云、

あり、家柄としては為政者である。ここにみた鹿島に特有の神話解釈には、為政者としての平国(ひとむけ)の剣の思想が強く反映されていると考えてよいだろう。

日本書紀の記すように、剣を地に逆さまに突き立てて、その切先に座り、神変を現したのではない。柄を握り切先を地に突き立てて、剣を後ろにして、その前に座つたのである、といった内容である。

本来の國譲り神話からはかなりの変形がみられる。

(1) 本連載、第9回目参照。

(2) 鹿島神宮では、毎年正月に龜ト(き)トによつてその歳の吉凶を占い、これを全国に鹿島の事(ことぶ)触れとして伝えていたが、吉川家はこのト占を職務としていた。

(3) 一の太刀については、先学において、この道統のどの段階で創始されたのかといふことが問題とされてきた。国摩真人の伝承でも、この剣をもつて大国主を斬つたりはせず平和的に國譲りを完結させたところに特徴がある。これが鹿島の伝承では、更に切先を下にして突き刺し、その剣の前に座るという。つまり全く武力に頼らず、できれば平和的に事を成し遂げようという姿勢を強調している。これは流派の理念ともいいうべきもの表れであろう。

ト伝の生家である吉川家は、鹿島神宮のト部職であると同時に鹿島城の家老職でもある。